

## 随想

## ギャルとギャル男の人生観

## ～ 実体を生きる生産者へのオマージュ ～

加藤 宏光

「イベサー」とか「ギャルサー」という言葉をご存じだろうか？

先日大阪出張の帰途にキヨスクで目に留めた本、『ギャルとギャル男の文化人類学』という書物（新潮新書、荒井悠介著）の冒頭に出てきた新人類語である。

「イベサー」とはイベント・サークルを、「ギャルサー」とはギャル・サークルのことを意味するのだそうである。そして、イベサーを構成するメンバーを「サー人」、ギャルサーのそれを「ギャルサー人」と呼ぶらしい。

話とはとんで、「婆娑羅（バサラ）」とか「傾奇者（かぶきもの）」という言葉をご存じの方も多いと思う。婆娑羅も傾奇者も同じ意味で、戦国の末期に、世間の目を驚かす風体や行動を行う慮外者を指す。ある意味、一世を風靡していると

もいえる、前田慶次郎（伊賀上野出身で、さまざまな転機を経て加賀前田家の養子として跡取りになるも、織田信長の命で次男利家が家を相続し、傾奇者として放浪する。故隆慶一郎になる）『夢庵放浪記』を劇画化した少年週刊誌で

「花の慶次」が広く読まれ、今もパチンコ業界等で題材に取り入れられている）や昨年のNHK大河ドラマ『天地人』の主人公、直江兼統もドラマとはかなり違う婆娑羅であったという。戦国時代を過ぎて、江戸時代のはじめに江戸の町を闊歩した幡随院長兵衛（町奴）や水野十郎左衛門（旗本奴）に代表される奴がこの名残である。これらの人々は（多くは若者）、行き詰まった時代・社会への抵抗を精一杯に表そうとしている姿といえよう。時代を経ても同じ心が若

者の一部には息づいていることが実感できる。

とはいうものの、反体制（反社会）を標榜し、具体化するための風体（服装）であるのだから、その根底にはそこにある成熟社会で自己を表現しきれないエネルギーを吹き出そうというものであるため、反風俗的であることも否めない。そして、こうした集団を狙う群もあることは容易にうなずける。

この書物（『ギャルとギャル男：～』）には、スラングともいえる独特の単語や言い回しが解説的に含まれ、このような感性の若者たちがどのような風俗をなしているのかを垣間見ることができると

著者の自己紹介に履歴を見ると、彼が『イベサーの雄としてのlive（代表的なイベサー）』のリーダーを経て、慶応義塾大学大学院

でこの社会をテーマに修士論文を執筆した」という履歴を知るにつけ必ずしも釈然としないものを感じる。

また、ここで挙げるサー人たちの将来の夢を見ると『サー人を経ているにも関わらず、表社会で成功を収める』ことらしい。そして、このような小さい夢であっても、かなわずに普通人（『パンピー』と称する＝一般ピープルの略？）になる人や薬物依存や裏社会に埋没する例も多いらしい。

東京ガールズコレクションというファッションショーを立ち上げた人もいる、と紹介されているが、本文を読む限りサー人としての生活歴（パンピーである著者から見ても、眉をひそめるレベルのものが多）の経験（人脈を主とする）をいざれ活かして、ファッション

界や美容の世界で成功したいと考えているサー人も多い、とのことである。

これらの若者が自堕落とも感じ、生活を送りながら、そこに何とか自分なりの価値を見出し、その価値(人脈等)を生かして自堕落な時間潰しの期間をも何とか自分の「得」に繋げたいと思っている、と結論付けられる。

《怠けながらもそれを自分の得に：》という、損得勘定を含めて、昔の婆娑羅、傾奇者と呼ばれた人々に比べていかにも小粒であることは否めない。また、こうした人種を肯定的に書きつづる論調に、サー人のモラル定義についての記述がある。モラルの基準は「あくまでグレーゾーンの限界を行く」のだそうである。また、警察のやっかいになるのを恥とするもある。反社会、反体制をうたう集団にしては小粒であろう。罪に問われるのは、自身の(サークルを含む)将来に障害を招くため避ける、とも読める。

この書物を介して垣間見えるイベサー(ギャルサーにおいても同様であるが、ギャルサーの社会

に対する責任感はより希薄であるように思われる)の反骨意識は自己防衛的であり、反体制・反社会性はあくまで目立ちたいレベルにとどまっている。

著者の大学生時代は昭和三十七(四十一)年で、その後安保闘争が激化して東大安田講堂事件をはじめテルアビブ乱射事件、連合赤軍事件をピークとして徐々に鎮静化されてきた。

思うに、当時社会主義や共産主義が理想郷といった白昼夢に踊らされた若者たち(必ずしも貧困層ではない)が、アメリカ追隨の体制に猛烈な拒否反応を起こしたのであった。つまり、社会の構造に不満をもつ分子が直接ぶつかる敵が明確である場合には、行動を理論武装しやすい。

先に挙げた婆娑羅、傾奇者が戦国時代初期には現れにくく(婆娑羅大名として有名な佐々木道誉、松永弾正等もあるが…)、豊臣秀吉によって安寧が確保された安土桃山時代になって、今言う半端な傾奇者が跳梁するようになっていく(ちなみに、町奴が現在のヤクザの原型とされている)。

荒井悠介氏の解説によれば、いわゆるストリート系ファッションの流れは、こうした反体制のシンボルとして現れ、現在に至っているという。

辞書を紐とけば、ストリートファッションとは、形にとらわれない若者向けのカジュアルなファッションとなつている。しかし、氏はこのファッションに反体制的な意義付けをしているのである。

反体制的であるのをスタイルとしながらも、警察のやっかいになるのは恥であり、あくまでグレーゾーンをそれとできるだけ黒に近いグレーゾーンを歩むのがカッコいいとされるなどという主張はいかにも上辺のみの格好づけに終始して、見苦しいと感じざるをえない。

しかも氏はこういった若者たちをある意味で社会の底辺と位置づけ(底辺とは必ずしも経済的に貧困を意味しない)、その内幕をバラすことで修士のタイトルを得るという、著者の感覚でいえば裏切り行為に近い行動をとりながら、それを声高に(正義として?)語っているのである。

これこそイベサーの真骨頂であろう。彼は、十年近く前に社会問題としてマスコミを賑わせた、フリーサークルを誹謗してやまない。確かに、イベサーやギャルサーのようなメンバーに特定したイベントではなく、パンピー(一般人)をターゲットにして、性的な強要をした点(一般人としての参加者が告発したために表に現れた)では氏のいうイベサー、ギャルサーとは異なる部分を認める。とはいっても、著者のように真正のパンピーにとつて、この程度の差異は大同小異と感ぜられてならない。

ただ、大人を以ってなる一般社会の構成システム(多くは会社)が、社会問題を惹起したフリーサークルのスポンサーとしてあるいは受け皿をもうけて、参加費の上前をはねる、あるいはそれに近い行為をしていたことは、マスコミの取り上げる以上の反社会的行為と断じざるを得ない。

著者をはじめとする、生産を基盤とした実体経済を目指す人々から見ると、このような虚業がはびこることは忌まわしく感じられよう。